

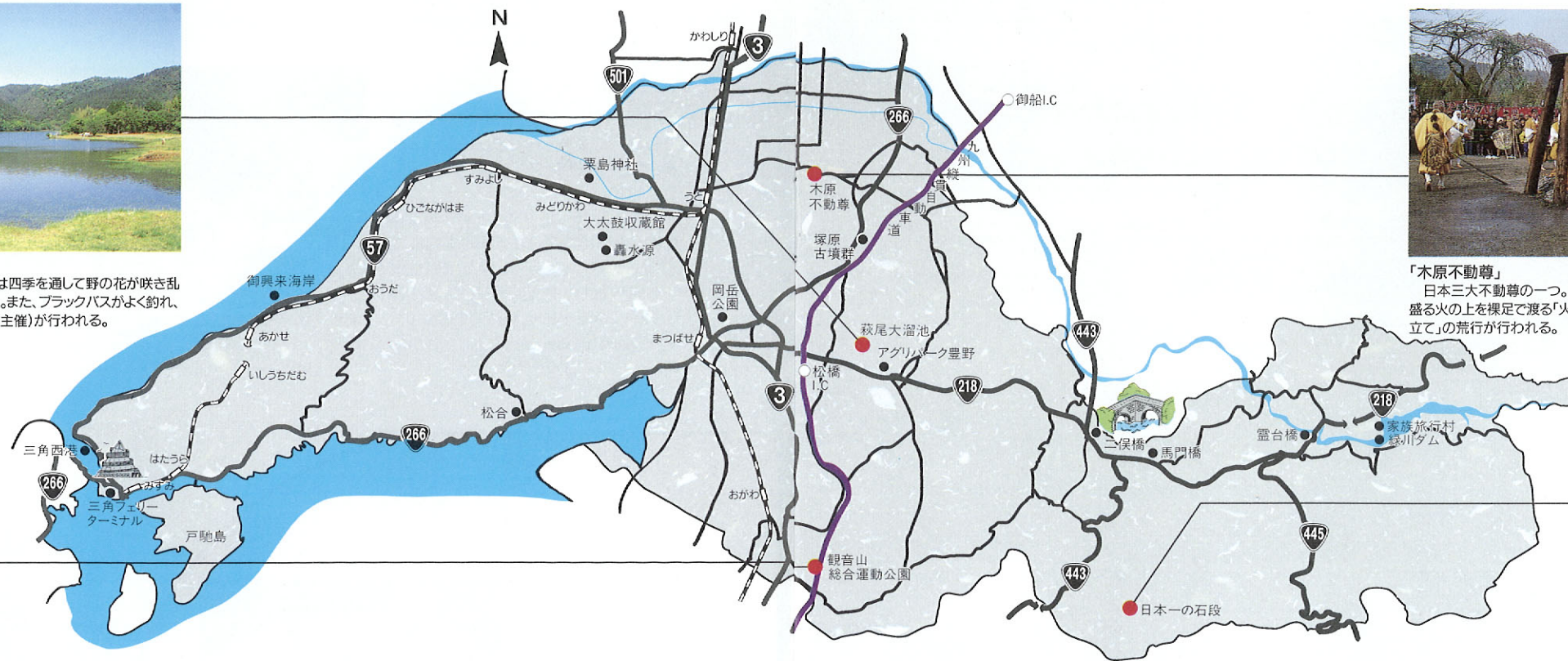
宇城



「萩尾大溜池」
九州最大の人工溜池。周囲には四季を通して野の花が咲き乱れ、町民の憩いの場となっている。また、ブラックバスがよく釣れ、毎年9月下旬には、釣り大会(町主催)が行われる。



「観音山総合運動公園」
多目的グラウンドやテニスコートなどの運動施設、生涯学習教育施設の「観音山ふれあいの里」が設けられている。鹿園、くじゃく園などもあり、健康づくり、スポーツレクリエーションの拠点として利用されている。



「木原不動尊」
日本三大不動尊の一つ。2月28日の大祭では、修験者が燃え盛る火の上を裸足で渡る「火渡り」や、沸騰した湯を体にかける「湯立て」の荒行が行われる。



「日本一の石段」
3,333段もある日本一の石段。頂上の釈迦院に通じる急坂を石段として整備したもの。世界各地から送られてきた石材が使われている。途中、トイレや休憩所も整備され、頂上からの眺めも素晴らしい。

豊かな自然と受け継がれる歴史
穏やかな冬の青空が広がる日、
古くて新しい町々を訪ねた

山の町、野の町、海の町

険しい山脈が恵み豊かな大地へと身を沈める。清流が冬枯れの田んぼを縫うように流れ、季節が春へ向かうかのよこに海へたどり着く。うつろい季節の中で、今も昔も人々の暮らしは大地に刻まれている。

自然の恵み豊かな山里

冬の陽射しを反射して、キラキラと水面が光る。下益城郡砥用町の「家族旅行村」(砥用)から緑川ダムを見下ろす。キャンプ場、ケビン、ヨットハーバー、テニスコート……。ここは、自然が主役の遊園地。山と湖に囲まれた眺めは、あくまで爽やかだった。



家族旅行村「砥用」



アグリパーク豊野

空市場には、季節ごとにメロン、モモ、ナシなど村特産の野菜やフルーツが並び、豊野村ならではの施設だ。

古代人の魂が眠る丘

豊野村から城南町に入ると、いつの間にか広々とした平野に入る。造成中の城南工業団地の横を通り過ぎる。四十二号もある土地をブルドーザーが力強く動き回っている。次々と整備される土地から新しい力が湧いてくるようだ。この工業団地は、今年四月から分譲が開始される予定だ。雁回山の山麓、九州自動車道の上にある塚原古墳群。昭和四十七年、九州自動車道の建設をきっかけに本格的な



塚原古墳群

発掘調査が始まった。その存在は肥後国誌にも登場しており、かつては約五百基もの古墳があったという。現在は公園として整備され、伏せたお椀のような形の古墳がポコン、ポコンと盛り上がっている。近くにあった古墳に上ってみた。この台地に初めて古墳が作られたのが、四世紀の終りごろだという。周辺は古代人の生活の場だったのだろう。千五百年たった今も、人々の生活の場となっている。隣町の松橋町の大きなショッピングセンターには、周辺の市町村から人が集まり、活気ある生活の場を生み出している。うらかな小春日の陽光の中、この地に生きたであろう古代人の魂へ思いを馳せた。

生き続ける伝統文化

古墳が点在する平野を抜けて、宇土市内へ。目指す「大太鼓収蔵館」は、名水湧く轟水源の隣にあった。市内各地に点在していた雨乞い太鼓を集めた施設だ。二十六基の内二十四基がここに収められている。大きいもので直径一

メートル、長さ約二メートル、胴回り五メートル以上にも及ぶという。胴に使用されているケヤキは樹齢七百年とも千年とも。夏に行われる大太鼓フェスティバルや各



大太鼓収蔵館

地の祭りで演奏する機会も多い。蔵の中で、大きな太鼓がズラリと並び、太鼓たちは、順番に備えて英気を養っているようだった。こぶしでポンと叩いてみた。館内に「ドォォン」と音がこもった。

明治旅人への港

穏やかな表情を見せる有明海沿いを走る。明治二十年完成の「三角西港」は、オランダ人一等工師ムドルの設計。伝統的な日本文化と異国情緒がミックスされた雰囲気。切り石積み、埠頭、築港記念館、物産館のムドルハウス。小泉八雲が泊まった旅館「浦島屋」も復元されている。築港当時からあるというアコウの木の下に腰を下ろす。遠くから船の汽笛が聞こえる。明治時代へタイムスリップしたまま、しばらく時間が止まったような気がした。



三角西港

歴史をたどり、伝統文化を訪ね、山里から野を経て港へ。それぞれの土地で、それぞれの町づくりに出合った。そこには、それぞれの異なった自然や歴史を背景に、個性を伸ばしたいながら未来へ前進する町の姿があった。